

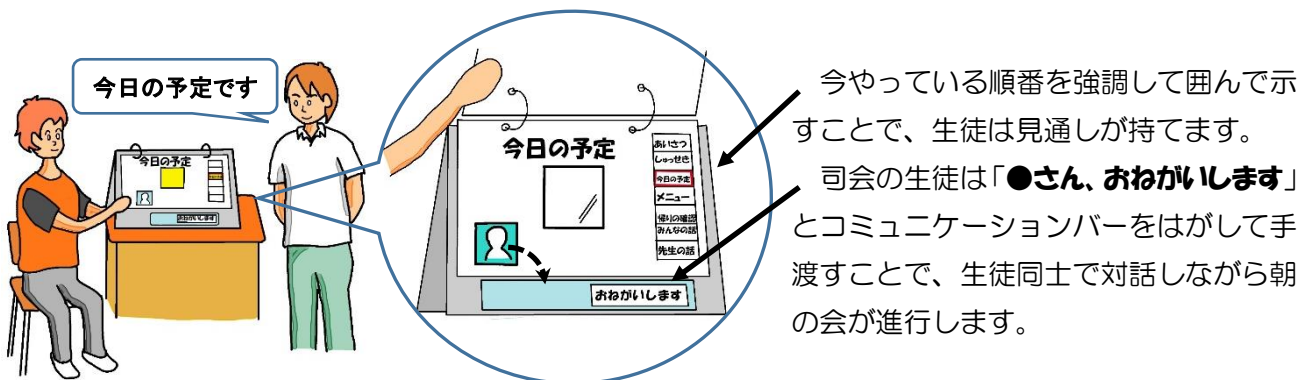
相談支援つうしん

<第 61 号>2020 年 5 月 7 日
県立湘南養護学校 支援連携部
相談支援係 ~教師編~

~校内の風景~

中学部 主体的かつ対話的な朝の会

昨年度の実践ですが、中学部 2 年生では生徒が朝の会で主体的かつ自立して進行することができるように下のような形態を取っていました。司会の生徒は 1 枚ずつ表をめくりながら進行し、音声言語がない生徒が司会の場合は先生が読み上げます。めくりの真ん中に今行っていることが表示され、右の縦の欄には全体の進行スケジュールがあります。司会の生徒は、“今日の予定”を発表する生徒の顔写真をコミュニケーションバーに貼って渡します。渡された生徒は今日の予定を前に出て発表します。



今やっている順番を強調して囲んで示すことで、生徒は見通しが持てます。

司会の生徒は「●さん、おねがいします」とコミュニケーションバーをはがして手渡すことで、生徒同士で対話しながら朝の会が進行します。

さらに朝の会が進行して“みんなのはなし”のコーナーです。下の図にあるように生徒の顔写真が予め貼ってあり、司会の生徒は 1 人ずつコミュニケーションバーに貼って渡します。渡すときに「○○さん、おねがいします」と 1 枚ずつ指さすことで、渡された生徒は相手の“言葉”を理解します。渡された生徒は前に出て前日の出来事などを発表します。発表するときには、音声言語を持つ生徒は音声で、そうでない生徒は実態に応じて絵・写真カードやシンボルを用いて発表します。



この形式を使うと、音声言語を持たない生徒や重度の知的発達の遅れを持つ生徒も自立して朝の会を進行しやすくなり、担任の先生は補助的な役割を担うだけとなります。

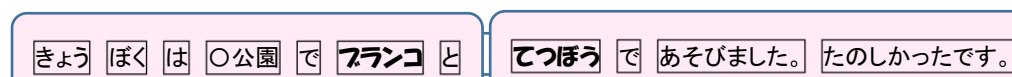
同様の取り組みは小学部でも高等部でも実践されています。高等部では iPad を活用して朝の会や帰りの会で発表をする生徒もいます。朝の会や帰りの会は、毎日行える重要な指導の機会であること、そして、毎日時間が確保できるからこそ活用することが大切なことを改めて考えさせられました。



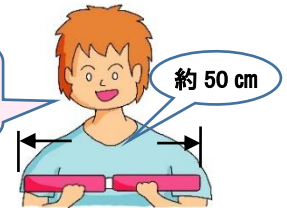
さらに中学部 帰りの会『がんばり発表』

次にご紹介する実践も昨年度の取り組みです。校外歩行で近隣の公園に同行させていただく機会がありました。ひとしきり活動して学校に戻る準備をした後に、先生が生徒に次頁のような質問をしていました。とても丁寧に振り返りをしているなと思っていたのですが、最後に、「じゃあ、そのことを帰りの

会の「がんばり発表」で発表してください。」と伝えていました。こちらの実践も帰りの会を単なるルーティンの活動にすることなく、発信する力を伸ばすための学習の機会として活用し、無駄にせず指導されているのだと感動しました。この学年の「がんばり発表」に使われているコミュニケーションバーは継ぎ足しがされて、すごく長い（25cm×2）と前から気になっていたのですが、その理由の1つがここにあったのか！と納得することができました。さらに、生徒たちは帰りの会が始まるころになると、みんな自発的にがんばり発表の文を作り始めます。こうした生徒の主体的な取り組む姿勢を引き出した先生方の指導に感動しました。



※“フランコ”と“てつぼう”は生徒がホワイトボードマーカーを使って空白のカードに手書きします。



適切な行動を具体的に伝えて、その通りにできたことを褒める

話題はがらりと変わりますが、中学部の“がんばり発表”の実践では、帰りの会するときだけではなく、午前中の学習時間からすでに指導（しかけ）が始まっています。この実践のことを考えているときに、ふと愛着障害を抱える子どもへの支援に関する文献に似たような記述があることを思い出しました。愛着障害を抱える子ども、とりわけ自閉症スペクトラム障害を併せ持つ場合、状況を察することが苦手なために、場にふさわしくない行動をとって叱責される経験が多くなり、先生も振り回されてしまいがちです。これでは後追い指導になって子どもに主導権を握られてしまいます。逆に、先生が褒めたとしても、彼らは何がよかったのか理解したり察したりすることも不十分で、褒められる経験から学んでほしいことが積み重なりにくくなります。せっかく褒めるのであれば、適切な言動を十分に積み重ねてほしいものです。そのためには、“**これができたら褒められるよ**”と先手を打って正解を示し、お膳立てをするというしかけがより重要になってくるのだそうです。いわば、**主体は子どもだけど主導権は大人が確実に握る支援**が重要で、学習活動の枠組みやルールといった教員の主導権の中に、子どもの主体性の保障に加えて、適切な振る舞いを引き出す工夫がより具体的に組み込まれているということでしょう。中学部のがんばり発表も場当たりのではなく、主体性と成功体験が引き出されるように布石を打っているところがすばらしいです。

愛着障害や発達障害を併せ持つ子どもの支援についてはたくさんの工夫や役割分担に基づいた取り組みが必要です。本当ならもっとご紹介したいのですが、とても紙面には収まり切れませんので、下記の文献をご参照ください。ただ、本書は幅広かつ詳細な記述があるので、そのすべてを理解して一気に取り組むことは難しいでしょう。そこで、本書の読み方として、「これだったら自分にもやれそうだな。」という支援から実践してみるとよいと思います。実際に実践してみると、きっと「これもやった方がいい。こっちも必要だ。」と必要なことが増えていくと思いますので、徐々に実践をつなげたり広げたりしていくとよいのではないかと思います。特に高等部の先生方には必読書になると思います。私は2回読みましたが、何度でも読みたくなる良書です。

☆愛着障害・発達障害 現場で正しく子どもを理解し、子どもに合った支援をする 「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム 米澤好史 福村出版 2015

☆やさしくわかる愛着障害！一理解を深め、支援の基本を押さえる― 米澤好史 ほんの森出版 2018